

然シ通常葉ト花葉トノ關係ヲ考察スルニハ甚ダ好都合ナ材料ト言フコトニナルカラカゝル個體ヲ栽培シタラ教
材トシテ甚ダ面白イト思フ勿論一個ノ畸形ニハ過ギナイガ人間ノ畸形デアル有尾人ト同様ナ意味デ花ノ起原ヲ
語ルモノトシテ大切ナモノデアルカラワザワザ報告スルコトニシタ

○断枝片葉 (其三十二)

牧野富太郎

○どんどばな

神宮司廳藏版ノ『神都名勝誌』卷ノ一ニ左ニ掲ゲタ圖ヲ添ヘテどんど花ト云フ植物ガ出テ居

どんど花二圖 大加圖



『神都名勝誌』ニ出セルどんど花ノ圖

(縮小)

リ其レニ「此の地〔伊勢齋宮ニアル齋王隆子ノ御墓道〕より、艮位に當り、古路と稱する所あり。此の所に、二町許もある沼地あり。一種の花菖蒲生ひたり。土俗、どんど花といふ。花時には、恰、紫雲のたなびけるが如し。近世まで、人の、杖を曳くもの多かりき。頃年、開墾して、舊觀を失ひたりとぞ、これ、齋宮寮花園の遺趾ならむか。」ノ文ガ付ケテアル、此どんどばなハ今日普ネク人家ニ作ラレテアルはなしやうぶノ母種即チ原種デ我邦ヲ通ジテ諸州ニ野生スル、殊ニ野州日光山中ノ赤沼ヶ原ナドニハ見渡ス限り之レヲ生ジ花

昭和三十年十月發行

時頗ル見事デアル花色ハ一樣ニ紅紫デ餘り變化ガナク葉ハ一般ニ瘦セテ隆起シタ中脈ガアル、昔奥州ノ安積ノ沼ノ花がつみヲ採リ來ツテ今日ノはなしやうぶヲ作ッタト云フ其謂ユルはながつみハ即チ此どんどうばなニ相當スルガ然シ此どんどうばなヲ指シテ斯クはながつみト呼ブノハ誤リデアルト思フ何トナレバはながつみハ元來まこも（禾本科ノ水草）ノ花デアルカラデアル是レハ多分其時安積ノ沼デノ採集者ガ古今集ニアルみちのくのあさかのぬまのはなかつみかつみるひとにこひやわたらんトイフ歌ヲ強テ此レヘ附會サセ縦マニ其美稱ヲ稱ナヘタモノデアラウ、此どんどうばなノ名ハ濃州邊デモ亦云フト見エテ飯沼懲齋著『草木圖說』卷ノ二ニモはなしやうぶノ條下ニ「一種山中ニ自生スルモノアリ之ヲドンドバナト云フ、葉劍脊アッテ家殖ノ品ト同ジケレドモ花小ニシテ不堪觀」ト記シテアル、此どんどうばなハ即チ今日吾人ノ稱スルのはなしやうぶデ *Iris Kaempferi* SIEB. var. spontanea MAKINO. ノ學名ヲ有スルモノデアル

● **Fatsia** / 語原 *Fatsia* ハ我が八つ手ノ屬名デ曾テ DECaisne ド PLANCHON トノ兩氏ガ建テタ名デアル其語原ノ解ハ私ノ見タ書物ニハ唯日本ノ名カラダトシテアル外ハ書イテナク即チ土言ノ *fatsi* カラ來タシテアルニ過ギナイ然シ此屬ノ植物ニ單ニはちト云フ植物ハナイカラ私ノ考フル所デハ是レハ多分八手ト書イテアッタ八ヲはちト音讀シテソコデフアチア即チ *Fatsia* ノ屬名ヲ作ッタモノデハナイカト思フ

● **冬期ニ小枝ノ墜子ル樹木** 冬期ニ至テ自然ニ小枝ノ枯レ墜チル樹木ハ敢テ珍ラシクハナイ私ハ曾テ其レ等ヲ『植物學雜誌』ニ書テ發表シタコトガアッタガ其レヘ追加センガ爲メニ此ニ三ツノ樹ヲ擧ゲル即チ其一ハぼろぼろのきデ其二ハうはみづかくら其三ハけんぼなしデアル、ぼろぼろのきハ九州ニ產シ其小枝ハ秋落葉スル時分ニ墜チル其離レ去ツタ痕ハ多少肥厚シテ居ル、又うはみづかくらモ小枝ガ秋ニナツテ落葉後ニ續イテ散落スル特性ガアル、又けんぼなしハ是レ亦秋ガ深ク木枯シガ吹ク時分ニナルト其端ニ實ヲ着ケタ小枝ハ樹上カラ地上ニ落下スル

● **ひばトびはトノ間違** 陸中ノ嚴手郡ナル滋民村ニ寶徳寺ト云フ寺ガアツテ其寺ノ前ニ大人ガ三人シテ抱ヘル位太イ針葉樹ガアル林學博士本多

靜六君ガ大正二年十二月ニ發行セラレタ其著『大日本老樹名木誌』ノ第三六四頁ニ此寶德寺前ノ大樹ヲ門枇杷ト書キ尙其傳說トシテ「同所ニ尙地上五尺ノ周圍一丈樹高十間ノモノ一本アリ共ニ枇杷トシテハ稀レナル大木ト云フベシ傳說ナシ」ト書イテアルカラサー大變先ヅ真ッ先キニ不審ヲ抱イタノガ日本柑橘研究家トシテノ第一人者田村利親君デアツタ早速同君カラソソナ大キナ枇杷ハ珍ラシイ果シテ其地ニ其レガアル歟ト同地ヘ問ヒ合セタラ何シノ事ソレハひばノ間違デアツタノデ同君ハ呆氣ニ取ラレタ(是レハ今カラ餘程前ノ事デアル)、扱其ひばハ同地ノ方言デアルノデ果シテ其正體ハ何樹デアルカ其レガ突止メ度ノデ私ハ三四年前ニ之レヲ同ジク澁民村役場ヘ問ヒ合セタ所其返事ハ矢張ひばデアツテ無論びは(枇杷)デハナカツタ然シ單ニひばデハ尙其樹ガ能ク呑ミ込メンノデ今度ハ巖手縣師範學校在勤ノ鳥羽源藏君ヲ煩ハシテ其小枝ヲ送ツテ貰ツタラ始メテ其レガさはら(Chamaecyparis pisifera ENDL.)デアルコトガ判ツタ其後同君ハ親切ニ其樹ノ寫真ヲモ贈ラレタ、聞ク所ニヨレバ此地方デハひのきトさはらトヲドツチモひばト呼ブトノ事デアル

●春時枝頭ニ芽出ツたら

芽 譲州三豊郡辻村大浦優雄君ヨリ來信ノ一節「春暖い時季が訪づれると、とりぐの草木の芽は先づほほ笑む、中にもたらのきの芽は殊に大きくこれが山人の酒興を増すといふ、それは今將にほころびんとする芽を摘み來り之を熱灰の上で焼いて味噌和とする其の味はさまでよいものでは無いが香氣はまことに愛すべきものだと聞く、又湯で煮たものを味噌和としてもよいが香氣が少くなると云ふ……山人から聞いたまゝを書いた次第です」

●ほたるぶくろノ花ヲ食フ

白馬山ノ北十里バカリ信越界ニアル小谷(云ハナイトハ)溫泉デハ

小兒ほたるぶくろノ花ヲ採ツテ籠ニ入レ持チ歸ツテ煮テ食フ同地デハ白花ノ品ガ多ク紫花ノ者ハ少ナイト云フ

●桑ノ葉ヲ飲料トス 原宮男君カラ聞ク所ニヨレバ周防國大島郡日良居村大字土居(云ハナイトハ)品ガ多ク紫花ノ者ハ少ナイト云フ桑ノ葉ヲ生ノマ、デ日ニ干シ乾イタノヲ揉ミ毀ハシ焙烙デ炒リ之ヲ普通ノ茶ノ如ク湯ヲ入レソレヲ飲ム、タゞ口ザワリ軟カナ感ジガスルノデ之ヲ飲ムバカリデアル又時ニ茶粥ニ入レルコトモアル(私ハ同君カラ其實

物ヲ貰フタ事ガアル)

●何首烏ノ塊根ノ大サ

我邦ニ生エテ居ル(原トハ支那カラ來テ)何首烏ノ根

ノ最大ナルモノハ周リ一尺二寸(曲尺)重サ四百二十匁ニ達スル、又何首烏ノ塊根ハ陰地ノ根ニハ出來ズニ陽地ノモノニ能ク生ズル故ニ陰地デハ根ヲ堀テモ一向其塊根ニ出會ハヌトノ事デアル

●なすノむだ花

なす(茄)ニむだ花ノアルコトハ一タビ茄烟ニ行ツテ見タ人ニハ直グ分ル、私ガ曾テ『科學知識』誌上デ其むだ花ヲ書イタ事ガアツタガ其時ノ圖ニむだ花ノ花柱ガ少々雄蕊カラ上ニ出テ居ツタラ(此レハ實物カラ其通り寫生シタモノ)茄ヲ研究シテ居ルト稱スル或地方ノ某氏カラむだ花ノ花柱ハ決シテ雄蕊カラ上ニハ出ズ悉ク皆短カク下ニ潛ンデ居ルモノデアルトテ私ノ描イテ出シタ圖ヲ非難シ來ツタ事ガアツタガ私ハ其非難ヲ甘受スルコトハ出來ナカッタ、ナゼナラバ茄ノむだ花デモ花柱ガ雄蕊ヲ超エテ更ニ上ニ突キ出テ居ルコトハ決シテ珍ラシクナイカラデアル、中ニ潛ンデ短イモノモ無論普通ニアルガ又前記ノ様ニ雄蕊カラ上ニ出タモノモ少クナイ殊ニ私ノ『科學知識』ニ描イテ出シタ花ハ非常ニ勢ヨキ強壯ナ株ノ枝ニ咲イタモノデアツタノデ正ニアノ圖ノ通リデアツテ決シテ間違ヘテ描イタモノデハナイ私ハマダソンナヘマハセンツモリデアル、むだ花ノ花柱ガ必ず雄蕊ヨリ短クテ下ニ潛ンデ居ルトノミ思ツテ居ル人ハ未ダ廣ク茄烟ヲノゾカナイおめでたい人デアル

●やつこさう琉球ニモ産ス

やつこさう(Mitrastemon Yamamotoi MAKINO.)ガ琉球ニモ産スルコトガ明

ニナツタ即チ沖繩島那霸國有林内ノしいのきノ根ニ寄生スル●大ナルびなんかづら 東京駒込妙義坂上ノ某氏ノ庭内ニ在ルびなんかづらハ其藤蔓頗ル太ク根元ノ大サ周圍九寸、根元カラ一尺五寸許リ上ノ處デ周圍五寸六分ヲ算スル

●支那人ノ植物方言ニ三

大賀一郎君ノ報ズル所ニ據レバ滿洲デ支那人ハさみか

げさうヲ眞珠梅、さくらさうヲ翠蘭花ト云ヒロはおきなぐさヲ毛姑草花、老姑草花、老谷花ト云ヒ尙此おきなぐさヲ張家口デハ白頭草トモ野大人トモ云ヒ北京デハ白頭翁又ハ猫頭花ト稱スル●だいこん根上ノ細根
だいこんノ根ニハ其兩側ニ細根ガ列ヲ成シテ生エテ居ルガ此細根ハ其子葉ニ對シテ對生シテ居ル